

# 寄り添う映像

熊谷 博子

東京新聞 夕刊コラム『放射線』（現・『紙つぶて』） 2007年1月15日

---

阪神大震災は、私にとっても大きな転換点だった。

12年前のその日、私は『ふれあうまち』というドキュメンタリー映画を編集している最中だった。東京の向島と独ハンブルクの下町を舞台に、そこに住む人々が古いものを活かしながら、新しいまちをどうつくり育てていけるのかを描いた作品だ。燃える長田のまちを横のテレビで見ながらそんな“まちづくり”映画をつくるのは、何とも複雑な思いであった。

この映画を地方で最初に上映してくれたのが長田であった。

東京でたまたま映画を観た長田のまちづくりに奔走する住民が、消えてしまった長田のまちがここにあるじゃないか。これを見たら「もう一度自分たちのまちは自分たちの手でつくろう」と元気が出るのではないかと。

秋になっていたが、公会堂とは名ばかりの瓦礫の野原に建ったプレハブの建物に、皆が座布団をしいて座った。借りてきた映写機はあったがスクリーンはなく、模造紙をはった。人と人の新たなつながりを感じさせる、心温まる上映会だった。

生きていたのに助けられなかった、という話をたくさん聞いた。実は私もアフガニスタンの戦場で同じような体験がある。母親の腕の中で、栄養失調で死にゆく赤ん坊を自分で撮影しながら、もし私が医者や看護師であれば助けられたかもしれないのに、なぜ撮るのだらうと、ずっと自問自答してきた。10年近く前の、遠く離れ二つの場所の出来事が心の中で重なった。

その時以来思った。相手には絶対になり代われない。でも寄り添う映像を撮り続けよう。